日本の温泉の歴史と文化(二)　広がる日本人の温泉受容と「湯治」

794 年に平安京(京都)に遷都してから 12 世紀末まで約 400 年間続いた平安時代は、天皇の外戚となる藤原氏を中心に朝廷貴族が政治・経済社会・文化を主導した時代である。その貴族たちの日記や朝廷に仕える才媛の誉れ高い女官たちが書いた物語作品に登場する温泉地の数は増えていく。飛鳥時代のように天皇が宮殿を出て温泉に行幸することはかなわず、退位して上皇や出家して法皇となって初めて温泉にも行けた。日本の温泉受容の主役は朝廷貴族に代わったのである。

温泉地については、飛鳥時代からの「日本三古湯」の人気は変わらない。なかでも有馬温泉(神戸市)は都に近く、上皇・女院・貴族・大寺院僧侶らが足繁く訪れた。直接行けないときは、温泉を 200 個もの樽に詰めて牛車で大阪近郊に設けた別荘まで運ばせ、温泉浴を堪能する有力貴族も現れた。今日流行の温泉宅配便の元祖と言える。

有馬温泉の主要泉源の一つ、神社境内に湧く「天神泉源」(提供：石川理夫)

新しく平安時代の文献に登場する温泉地では、柳並木の河畔沿いに和風木造旅館や共同浴場が軒を並べる温泉情緒で人気の城崎(Kinosaki)温泉(兵庫県)、清少納言の『枕草子』に登場し、女性歌人が和歌に「七栗の湯(Nanakuri-no-yu)」と詠んだ榊原(Sakakibara)温泉(三重県)、温泉名所として和歌の「歌枕」にもなった「Natori-no-miyu」の秋保(Akiu)温泉(仙台市)などが代表的である。

平安時代半ばの 10 世紀前半に成立した『竹取物語』は、中国神話の「嫦娥」に似て最後は月に帰る「かぐや姫」が主人公(ヒロイン)である。美しいかぐや姫に求婚する貴族は多いが、結婚する気のない姫は無理難題な要求をつきつけて求婚者を退ける。その一人「庫持皇子」は、はるか東方海上にあるという「蓬莱の珠の枝を取ってくること」を条件とされた。皇子は朝廷に「筑紫の国に湯浴みに行ってまいります」と温泉療養休暇を願い出て許可されると、かぐや姫には珠の枝を取りに湊から船出したと思わせて、隠れ家で金銀真珠を使って工匠らに偽物を作らせた話が出てくる。

物語からは、貴族も朝廷に仕える身なので、温泉地に出かける際には休暇を願い出る必要があったことがわかる。しかし「湯浴みに行く」と言えば、温泉療養を意味し、簡単に認められた。そして「筑紫の国に湯浴みに」と言えば、朝廷の九州における出先機関「大宰府」に近い二日市(Futsukaichi)温泉(福岡県)をさすという了解があった。奈良時代に大宰帥(大宰府長官)として赴任した歌人の大伴旅人が「次田温泉に宿りて」亡き妻をしのんで詠んだ和歌が『万葉集』に収められているように、古くは次田(Sukita)温泉と呼ばれた由緒ある温泉地である。

二日市温泉の共同浴場の一つ「御前湯」(提供：石川理夫)

庫持皇子は「湯浴みに行く」と嘘をつき、工作に要する休暇を確保した。それでは他の貴族たちは、本当に病気を抱えて温泉療養のため出かけていたのだろうか。じつはそうとも言えない例が散見される。

10 世紀半ばの長編物語『うつほ物語』に登場する貴族は、庫持皇子同様に温泉療養を理由に有馬温泉に出かけた。ところが「有馬の湯に行き、おもしろい所を巡り、興味深い所を見るにつけても物思いにふけってしまって…」と、名所観光ばかりしている。どうやら重症なのは恋の病らしい。我慢しきれず、恋心を詠んだ和歌に手紙を添えて、供の者に都まで届けさせている。

こんな例があった。自分の娘たちを 3 代の天皇の后妃(一家三后)とし、「この世をば我が世とぞ思う…」と歌に詠んだ藤原道長は糖尿病を患っていたようだ。そこで療養のため 1024 年 10 月に有馬温泉に出かけた。すると朝廷の大納言や中納言らが「為治風病云々」を口実にこぞってお供した。そのことを右大臣藤原実資の日記『小右記』は「追従でしかない」と批判している。最高権力者のご機嫌とりのため大勢で温泉に同行する朝廷貴族もいたのである。

もちろん謙虚に温泉の喜び、ありがたさに感激する貴族もいた。

平安時代には、紀伊山地の 3 つの霊場「熊野三山」に参詣する「熊野詣で」と呼ばれた聖地巡礼が盛んになった。世界文化遺産に登録された参詣道の熊野本宮近くに湯の峰(Yu-no-mine)温泉(和歌山県)があり、温泉で心身を清める「湯垢離場」となっていた。熊野詣でに出た右大臣藤原宗忠は 1109 年 11 月 1 日、渓流脇の窪みの岩底から温泉が湧き出る天然浴槽の湯屋で入浴体験した。「誠希有之事也、非神験者豈有如此事哉、浴此湯人萬病消除者」と日記『中右記』に記している。温泉効果が寄与したのか、宗忠は 80 歳という長寿をまっとうした。

平安貴族も入浴した湯の峰温泉の天然浴槽「つぼ湯」（提供：石川理夫）

平安貴族の日記には、容態が思わしくないときは、薬を飲み、あるいは「湯治」をした、と記されている。この「湯治」という言葉は中国伝来ではなく、日本で作られた。いかにも「湯」という漢字が最初から好きだった日本人らしい造語(国字)である。

「湯治」ははじめ温泉と関わりはなく、湯水を用いた沐浴、薬草を入れた薬湯、海水を自邸に運び入れて入浴する潮湯などの療養行為をさしていた。それが平安時代末期から次の鎌倉時代(12 世紀末～1333 年)に入ると、専ら温泉療養を意味する言葉として使われるようになる。

初出と思われる例を挙げよう。摂政関白を歴任した九条兼実の日記『玉葉』1186 年 8 月 26 日条に「兼忠依病、為湯治下向有間(馬)」と記す。病を抱えた貴族の兼忠が有馬温泉に出かけたのは「湯治」、すなわち温泉療養のためと指摘している。湯治が温泉と関わる言葉になったのは、それだけ温泉利用が広まった証左だろう。

温泉利用の広がりの裾野には一般庶民がいた。すでに奈良時代の地誌『出雲国風土記』は玉造(Tamatsukuri)温泉(島根県)について、「川辺出湯…。仍、男女老少、或道路駱驛…日集成市、繽紛燕楽。一濯則形容端正、再沐則万病悉除。自古至今、無不得験。故、俗人曰神湯也」と記した。温泉目当てに老若男女が毎日集まってきて賑わうから市が立つほ

ど。そして入浴の合間に人々は歌い乱れて酒宴を開いている。「神湯」と土地の人が讃えるほどの温泉効果とともに、温泉で喜び楽しむ庶民の様子がよくわかる。

箱根最大の温泉噴出地・大涌谷(提供：石川理夫)

日本の中世の幕開けとなる鎌倉時代、朝廷や貴族に代わって武士階級が政治・社会の実権を握った。最高権力者の「征夷大将軍」源頼朝が鎌倉(神奈川県)に「幕府」を開いたため、朝廷のある京都と鎌倉との往来が盛んになり、その途中にある箱根(Hakone)や熱海(Atami)をはじめとする東日本の温泉地が次々と表舞台に登場するようになった。そもそも日本の温泉資源の分布は、九州地方を除けば東日本が圧倒的に優位である。人々の温泉利用の対象は西から東へ、まだ北海道と北東北は除く全国各地へ広がっていくのである。

文　石川理夫